

## 97. 9. 15 彼岸会特別講演

ひろさちや氏との

対談を終えて（雑感）

1997年9月25日

弁護士 坂 和 章 平

### 第1. 講演要旨

ひろさちや氏の講演は「わたし主義のすすめ」と題するもので、その要旨は次のようなものでした。

#### 1. 日本の現状

1) 今の日本の国は90%が中流意識を持ち、5%が落ちこぼれ、5%が上流階級。その90%が「努力しろ、頑張れ」と鞭打って足のひっぱり合いをしており、ねたみ、そねみ、やっかみが充満している。

2) 「戦争の時、貴族は先頭に立って進む」という「ノブレス・オブリージュ」（高貴なる者の義務）というものが必要だが、日本にはそれが無い。「布施」についても日本人はみんな損することがキライ。

#### 2. こんな日本の中、仏教の教えをどう生かすか

1) 欲望主義（点数、隣の車、隣の冷蔵庫）をどんどん膨張させること（白灯明）はダメ。

2) まず自分を大切に、仏教の教えに沿って、私の自由にやっていく（法灯明）ことが大切。

3) 欲の奴隷になるな！自由人であれ！（自由とは自分に由ること）

4) タバコを吸う人はタバコの奴隷になっている。

5) 資本主義は欲望を次々とつくり出す、欲の奴隷を生み出し、学校も会社もみんな奴隷になっている。

#### 3. 人間はどのように生きればよいか

1) 「さんま」人間になろうという努力目標を持って。

「さんま」人間とは、

まると人間、まとも人間、まあまあ人間のこと

2) まると人間の反対は機能人間で、それはダメ。

→「諸法実相」（いいものも悪いものもそのままみること）が大切。

ex. 年をとればハゲてくる、勉強のできる子もいればできない子もいる、きれいな子もいれば不細工な子もいる、などありのままを受け入れること

3) まとも人間とは、欲ばかり考えないこと。

4) まあまあ人間とは、「いい加減」を知ること。

### 第2. 坂和章平の自己紹介と質問（ツッコミ）のポイントは次の諸点でした（別紙レジュメ参照）。

#### 1. 自己紹介

坂和は宗教心うすいが、震災復興で西法寺の上原照子副住職と知り合い、お寺の情報発信や教育機能に興味を持った。

#### 2. 質問のポイント

1) ひろ氏は「努力する」ということを否定しているように聞こえるが、その価値は率直に認めてよいのでは？

2) 自己肯定的努力はよい、自己否定的努力はダメと言ってもその「線引き」は難しいのでは？

3) 「いい加減」にすることはよいことだと思うが、何がいい加減かわかるのはかなり難しいのでは？

4) 身分制度でがんじがらめのインドよりも、身分差別がない日本の方が、「中流意識の中でのけなし合い」があるとしても、まだましなのではないか？

（坂本龍馬はアメリカで大統領が入れ札で選ばれると聞き、日本でもそういう自由な社会を目指した）

5) ヨーロッパ流の自由、平等、博愛というものの考え方は坂和にはピンとくるが、そのヒューマンイズム・人間主義をなぜ否定するのか？

6) 「じぶん主義」は賛成。しかし坂和は自分で合理的に考え活動している。そこに宗教は不要。それではダメか？

### 第3. 雑感

1 (1) 坂和は宗教的にものを見るときを日常的にやっていないが、本対談に備えてひろ氏の著書を5～6冊熟読し、いくつかのテーマについてノートを取り、ひろ氏の宗教によるもの見方や説明の仕方については大體理解できたと思う。

(2) その理解の下で、ひろ説を整理すれば次のようになる。

（ひろ説）しゃかりきに努力し、頑張るのは、他者より優越したいという要素が強く、そういう「頑張り」はダメ。そんなことばかりしているから日本人はイライラがつのり、心の安らぎが得られない。

また欲望もエンドレスに広がっていく。「いい加減さ」を知ること。「明きらめる」ことが大切。

(3) しかし、これに対する（坂和説）は次のようになる。

頑張り、頑張りといわれイライラしている人の例として、会社人間、塾人間などが挙げられており、その人達に対して、宗教の観点から「ほどほどでいいよ」「新宿のホームレスは幸せだよ」と慰めてあげる効用は認める。

しかし例えば「夏休みの間頑張ってプールで泳げるようになる」「少しでもピアノをうまく弾きたい」などの頑張り、努力は必要。またそれは大なり小なり他人との「競争」があり、それを否定する必要はない。明らかめと無気力・無意欲とは全くちがう。

また努力をして目標達成した時のよろこびがある。それは率直に認めてもよいのではないか。それを「人事を尽くして天命をまつ」という思想はナンセンスでダメだと切ってしまう必要はない。きつねがぶどうの木の実をとろうとして2、3回とびついたが、届かないため「あのぶどうはすっぱい」と負けおしみを言ったという「サワーグレープス」の話にしても、日本人は「人事を尽くす」ため死ぬほどチャレンジするというのは極端にいい方で、合理的・科学的判断をもった日本人は数回～数十回いろんな工夫をしてジャンプしても届かなければ、これはムリとあきらめる（give upする）だろう。それは何も、私はあのぶどうは欲しくはないのだと自己変革をして宗教的にさとりをひらかなくても、合理的判断力があれば状況の把握と気持ちの整理はできる筈。

また欲望についても必ずしも無限に広がる訳ではなく、「ほどほど」は宗教の力を借りなくても人間の合理的な意思判断があれば可能。

2 (1) 日本の現状（とくに中流意識の中での足のひっぱり合いやそねみ）はよく理解できるし、「欲望の奴隷になるな」との教えもよく理解できる。しかしなぜそれを宗教によってのみ説明しなければならぬのかが坂和には理解できない。

これらの点は（社会）科学的にまた合理的・理性的に現状を分析し考えれば、当然得られる結論。資本主義は欲望を次々と生み出すという認識は正しいが、その否定面のみを強調して表現するのはダメ。大量生産が人間社会にもたらしたプラス面があることも認めるべき。

(2) また、インド（人）の考え方からみれば、日本人のセカセカした行動が異常にみえることはあるだろうが、身分制度（カースト制）のかっちりした中でそこから抜け出せないインド社会のマイナス面もきちんと把握の必要がある。

日本の現在の「平等社会」というのは世界的にも例のないケースだと思う。そこには多くの問題もあるが、例えば島田紳助という昔暴走族で鳴らした人間が漫才をやり、その中で才能を認められ、テレビのまっとうな政治問題での司会までやっているというような自由な社会はプラス評価してよいのではないか。「テレビに出る芸能人なんかはみんなダメ」というのはあまりにも一面的。

(3) また、自由、平等、博愛をキーワードとした近代ヨーロッパの「合理主義」という考え方はヨーロッパのキリスト教を背景としたものだが、より人間色をつよめたものだと思う。坂和はそういう合理的思考という基準の価値を非常に高く認めるが、ひろ氏が「ヒューマンイズム」という人間主義はナンセンスと切り捨てるのは理解しがたい。

3 (1) ひろ氏は「政治運動にはみんな党派性がある」とし、たとえば環境保護・資源保護のため割りばし廃止運動をすれば、割りばし業者をいじめることになるという。そしてお釈迦さんが釈迦国を3回以上教おうとしなかった例をあげ「滅びるものは滅びるのだから・・・」という。

しかしこの考え方には同意できない。「仏教者は環境問題についてもっと発言し具体的な運動をするべき」という考え方に賛成だ。

(2) またさかんに「今の社会は必死になって守るほどの社会か」と述べ「社会の調和とか秩序とかそれは政治家が考える問題で、私たちが心配することではない。そのために政治家を選んで雇っているのだから、私たちがのんびり自分の好きなようにやればよい」と述べるが、これも同意できない。

今の資本主義の世界が最善だからそれを守れというのではなく、日本の社会をどう考え、改善維持していくかは常に1人1人が考え参加していくべきテーマ。

現実の社会における犯罪、教育、政治、経済、住宅、交通、福祉etc.につき人々が納得できる説明、方針を与えていく努力をする中で、よりよいものが見つかる筈だ。それを否定し、「そんなことは政治家にやらせればいいと見放し」「滅びればいいんですよ」と表現することは賛成できない。

(3) また現実に発生したオウム事件につき、ひろ氏は「私はその問題については一切発言しなかった」というのは、ある意味では「ずるい」のではないかと思う。総論だけの議論ならば反論は少ないが、各論に入れば反論は当然多くなるし、オウムという現実におこった問題で発言すればその発言について賛否の声（反応）が出るのは当然。

「それを避けるため発言しなかったのでは？」と勤ぐられても仕方ないのではないか。とにかくオウムは勿論、新しくは土師淳君殺人事件などの「現実」、またタバコだけを論じるのではなく、原子力、環境、防衛、行政改革etc.すべての社会事象の「現実」について論じなければダメだと思う。

4 (1) 「努力主義」を否定するひろ氏に対し、会場からもひろ氏も「東大という最高学府を出て・・・」「失礼ながら立派な高価な服を着て・・・」との発言が出た。坂和も同感。

(2) ひろ氏が本を書き、講演をするについては、当然読者の反応、聴衆の反応に気がつかっている筈。資料集め、準備活動、1つのネタの切り口の工夫etc.人にはわからない、ひろ氏流の努力をしている筈。今はあまり意識しなくても自然にできているかもしれないが、それは努力の結果であり、その地点まで到達できたということ。

(3) ひろ氏が「自分の講演と司馬遼太郎の講演とどちらが人気があるか」「それで負けたらくやしい」とか思ったことはないと思うし、それは当然のこと。それはひろ氏が自分流の努力をしているだけで、司馬遼太郎の講演料より高くとってやろう、司馬遼太郎よりたくさん本を売ってやろうなどと競争する努力をしていないため。これは「この夏休み、何とか25m泳げるようになる」と自分の目標を決め、努力している人間と同じもので、積極的に評価すべき努力なのではないか。それをなぜ否定するようないい方をするのか。

(4) 日本人の大半は「真面目」。しかし、その真面目さは近代ヨーロッパのような合理性や個人主義とかの訓練を経ないため、どうしても「模倣」（悪くいえば西欧の猿まね）的色彩が強く、若干マンガチックなところがある。また、集団でまとまる傾向があるため、下手すると軍国主義一直線という恐さもある（ちょうど現在の北朝鮮のようなもの）。

しかし、日本人の真面目さは勤勉さに裏付けされたもの（農耕民族の特徴か？）で非常によい面もある。

「で・あ・いの精神」すなわち「でたらめ、あきらめ、いい加減」という教えはよいが、一方だけが強調されると、努力することや勤勉さがバカにされるような説明になってしまう危険がある。日本人の勤勉さ、真面目さ、そして努力することの価値は、もっと強調すべきではないのか。

5 (1) ひろ氏の著書の中に盛んに出てくる大岡裁きとソロモン王の判決についての「大岡裁きは人間が真実を知ろうとしているのに対し、ソロモン王は解決しようとしているだけ」というひろ氏の解釈は面白いが、納得はできない。

とくにソロモン王が「子供を剣で2つに切り、2人に分け与えよ」と言ったことに対し、A女が「そうしてくれ」といい、B女が「それはやめてくれ」といったところ、A女の「半分くれ」との発言は「子供が死体になるのだから、権利放棄をしたものとみなす」ため、B女に子供を与えよといふ解決だけをした、というのはひろ流解釈にすぎない。B女が「それはやめてくれ」といったことについて、多数説は「母親だから助命嘆願した」と解釈するのはなからうか。

(2) 同様にひろ氏は「疑わしきは罰せず」という格言は、地上の権力は神様の仕事を手伝う必要はなく、最終的に神様が裁いてくれるということだと説明し、アメリカの陪審制度や有罪の答弁について述べる。しかし、「疑わしきは罰せず」とは宗教的な考え方から生まれたものではなく、むしろ被疑者・被告人の人権を尊重すべきという思想から1723～80年ブラックストーンによって確立された「1人の罪なきものが苦しむより10人の罪人が免れる方がよい」との法格言から生まれたもの。

つまりイギリスの刑事訴追制度のキーワードであった当事者主義と陪審制度、公衆訴追主義、公開主義、口頭弁論主義、「伝聞法則による事実認定」などの要請により生まれたもので、宗教的観点から説明すべきものではない。

(3) また「実体的真実の発見」と「手続における人権の保障」という2つの要請をどう両立させるかが近代の刑事法の大テーマであるが、そこでは純学問的議論が必要で、宗教的議論は不要。

(4) 以上のように宗教と法律とが絡み合う分野についてのひろ氏の説明は、弁護士坂和の目・知識からみればかなり不十分さがある。

6 (1) ひろ氏もいうように、論理的にものごとを考へることは大切なこと。その点、ひろ氏の著書は非常に魅力的。しかしすべてを宗教の観点から説明すること（そうでないと説明できないかのような言い方）には抵抗がある。

(2) 今回の対談は坂和が宗教を考える1つのチャンスとして、坂和も大いに勉強でき有意義だった。是非2度、3度とやってみよう。

(3) また「書面論争」（手紙の交換による論争）を継続的にやることも面白いのでどうかと考えている。

7. 以上の坂和の雑感につき、参加者からの意見を是非聞かせて欲しい。

以上